

イギリスと日本：400年間の相互関係

アンソニー・ジョン・ファリントン

訳：長 島 弘

本日の私の講演のタイトルである「イギリスと日本：400年間の相互関係」は、おそらくもう少し明確にする必要があるでしょう。400年間というのは厳密には正しくありません。というのは、最初のイギリス人が日本に到着したことの400周年記念の日までにはまだ11ヶ月ありますし、また両国の関係はこの間継続的で中断のないものであったとは決していえないからです。しかし、両国の関係は近代世界の発展にとって大変重要なものであったと私は信じます。

「日本における最初のイギリス人」は、もちろん、あの有名なウィリアム・アダムズ、つまり三浦按針で、彼は画期的な太平洋横断航海をして1600年の4月中頃に九州の海岸に漂着したオランダ商船の航海士でした。1620年に平戸で亡くなるまでのその後の彼の日本での生活は、〔冒険の多かった〕17世紀の水準から見ても注目に値するものでありました。その船の役員の中で旅のできるほど健康な唯一の人物として、彼は船の到着後まもなく、大阪の徳川家康の下へ召還され、一連のお目通りの後に家康の信任を得、旗本の身分を与えられ、そのことにより幕府の直轄の家臣となりました。彼は江戸の西南の三浦地方の逸見（へみ）村に領地とその土地を耕作する農民80～90人を与えられました。そして日本人の妻をもらい、家康の2隻の海洋航行船の建造を監督し、彼自身日本の海岸線沿いに交易を行ないました。彼が日本語の会話を学んだ最初のイギリス人であったことは確実に

す。というのは1610年までに徳川幕府における非公式の通訳兼国際交渉役として活躍するようになっていたからであります。

日本に到着した最初のイギリス船は、イギリス東インド会社の船クローヴ号でした。その船は、ジョン・セーリス¹を船長とする船で、1613年6月に平戸に停泊しました。1613年の終わりに再び出帆したとき、セーリスは平戸に少数のイギリス人を日本にイギリスの商館（貿易のための基地）を築くために残しました。しかしその商館は商業的成功を取めませんでした。10年間もがいた後、この最初のイギリス人の日本との出会いは1623年12月に解消され、そして我々両国の直接の接触は終わりました。

数千マイルの空間と少なくとも1年間の海洋航海という時間によってへだてられた2国の遭遇という概念全体が、私個人には、大変魅惑的な事柄であります。私がロンドンを出発する直前に、BBC ラジオが今日の情景のある側面に関する一人の著名な学者による今年の一連の講義を終了したところでした。ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのアンソニー・ギッデンス教授による1999年の講義は、グローバリゼーション²のテーマに充てられていました。つまり、私たちすべてあるいは、少なくとも私たちの大部分が、今や、経済の力によって、また民主主義、平和、人権という共通の関心事によって結合されている一つの世界である、というテーマに充てられていました。この最初の日本とイギリスとの出会いをグローバリゼーションの全過程の初期の一步として扱うことは、おそらくあまりおかしなことではないでしょう。

後知恵では、グローバリゼーションは少なくとも表面的には、基本的に世界の「ヨーロッパ化」であり、その後では「アメリカ化」であると見られるかもしれませんが、しかしいつでも常にそうではありませんでした。16世紀にポルトガル人やスペイン人の商人や宣教師の進出し、17世紀に北

訳注1 ここでは我が国での慣習的表記法によったが、ファリントン氏の当日の講演では「サーリス」に近い発音をされていた。

訳注2 ファリントン氏は「グローバリゼーション」と発音されていた。

部ヨーロッパの、おもにオランダとイギリスの、貿易会社が進出していったアジアは、彼らがそこからやってきたヨーロッパよりもあらゆる面ではるかに洗練され、はるかに強力でした。人口、国の大きさ、その都市の富とにぎわい、王宮と君主、製造品や自然の生産物の多様さや種類についてみれば、アジアはヨーロッパに数段勝っていました。実際、「ヨーロッパの形成過程におけるアジアの役割」は、1500年から1800年にかけての世界史における最も重要なテーマの一つになります。

それでは、日本とイギリスのこの最初の遭遇はこのグローバリゼーションの過程でどのような役割を演じたのでしょうか。どのような知識が得られ、どのような教訓が学ばれたのでしょうか——もし何かそのようなものがあつたとするなら。不幸なことに、現存の史料からは日本の側が何を得たのかについての詳細な情報は得られません。クローヴ号が1613年12月に平戸を出帆したとき、その船の乗組員には15人の日本人の水夫が含まれていました。そしてそのうちの11人が1617年8月に生きて再び平戸に帰還しました。彼らのロンドンへの往復の旅は驚くべき冒険であつたはずですが、それについて彼らがどう思ったのか、私たちには知るすべがありません。

他方、ウィリアム・アダムズや平戸商館のイギリス人の手紙やその他の記録は、彼らが日本の多くの事柄に大いに熱狂し、尊敬していることを示す多くの証拠を提供してくれます。彼らは部分的に日本的な生活スタイルを採用しました。それには彼ら自身のお風呂も含まれていました。17世紀のイギリス人が規則的にお風呂に入るということは実際大変奇妙なことでした。彼らはお正月に近隣の日本人にプレゼントを持って行きましたし、庭の池に鯉を飼っていました。彼らはまた初期の徳川政権下の日本についてロンドンの東インド会社に伝達することを試みておりました。彼らにとって常に印象深かつたのは、政府の厳格さと彼らがよく知るようになった日本の大都市の住民の秩序だった行動でした。

平戸から大阪と江戸へ商品を運ぶ過程において、また徳川幕府へ贈り物を運ぶ使節の役割を果たす過程において、イギリス人は日本国内を何度も

旅しました。一般的なコースは、沿岸のジャンク〔船〕で下関海峡を通過して瀬戸内海を大阪まで行き、そこから京都まで舟で川を遡り、それから徒歩と荷馬で東海道を江戸まで行くものでした。平戸のイギリス人の代表であるリチャード・コックスは特に熱心な観察者で、鎌倉の大仏、京都の三十三間堂の内部、江戸城の大きさと立派さについてロンドン宛てに書き送っています。江戸城については、城だけでイギリスのヨーク市より大きく、20万人の守備兵を維持できると書いています。彼の記述の一部はイギリス王ジェームズ I 世の注目するところとなり、王は「それらについて読み、語ったが、そこに書かれていることどもが本当であると信じることができなかつた。しかし著者が帰国したら話してみたいと思った」のです。遠くへだたつた者同士の相互理解の始まりがいかに困難であつたことか。しかし日本に住んでいたイギリス人でさえ、盲点がありました。彼らの内の何人かはそこを何回も通過したにちがいないのに、現存の史料に富士山についての言及がまったくないのは、大変不思議なことだと思います。

地理学上の新知見（たとえば日本自体についてのほかに朝鮮と北海道についての）も、日本の諸都市や寺院の正確な記述もイギリス東インド会社の古文書館からはまだ見つかりませんし、誰も日本語のかんりの知識を身につけて帰国した者はおりません。ロンドンには大量の情報がありましたが、しかしそれは百年後にエンゲルベルト・ケンペルの見聞報告が彼の『History of Japan(日本史)』〔邦訳では『日本誌』〕の中に挿絵入りで紹介されるまで、よみがえりませんでした。

両国の最初の出会いは知的には失敗であつたと言わなければなりません。それはまた貿易の面でも失敗でした。それは今日のどんな経営学の学校にも事例研究として提供することのできるようないろいろな理由からでしたが。イギリス人は日本市場に適した商品を日本にもたらすことにいつも失敗していました。言いかえれば、彼らのマーケット・リサーチはまったく不十分でした。彼らは市場のメカニズムを理解するのに敏感ではありませんでした。彼らの販売予測はあまりに楽観的でした。そして現場の人たち

が商業的現実を理解し始めたときでさえ、ロンドンの「本社」が彼らの助言どおりには行動しませんでした。

400年前のイギリスの唯一の大量製品はブロードクロス(広幅布)の名で知られた重い、上質の毛織物でした。羊毛とそれから作られた布は14世紀以来富の大きな源泉でした。イングランドの最も富裕な商人は毛織物の輸出商人で、彼らのアジアにおける新しいチャンスへの接近の仕方は彼らのそれまでの経験に影響されていました。そのことをあらわす今日の言葉は「変化を受け入れるのが遅い」ということでしょう。日本は銀の源泉であるとして知られていました。実際、日本は大量の銀生産を行なっていました。しかしそのレベルはイギリス人の夢想から程遠いものにすぎませんでした。彼らはスペイン人が南米で享受したおとぎばなしのような富と比べられるような「エルドラド」(黄金郷)を心に描いていました。

マーケティング戦略はジャワ島のバンタムにあるイギリスの商館に基礎を置いていました。日本に向けて同地を出帆する船はイギリスの広幅布と雑貨品を運びますが、後者の一部はアジアの他のどこかで入手したものです。そしてその船は日本への途中で東南アジア半島の諸港に寄港します。それは日本で需要のあることが知られている中国商品をそこで購入することができると考えられていたからです。イギリスとアジアの商品の混合物はそれから日本で銀と交換に売られ、その銀はバンタムに持ち帰られ、その銀の一部は次の航海でさらに中国商品を購入するために保有されますが、その銀の大部分はイギリスに返送されます。

それは何というすばらしい計画だったことでしょう。しかしもしその基本的な仮定が正しかったとしてもそれを実行することは何と困難だったことでしょう。そしてもしその基本的な仮定が正しかったとしても、それを実行に移す段階での危険要因は莫大なものがあったことでしょう。とくに初歩的な通信システムと風と天候に左右される輸送手段を用いている中で、時間と場所を合致させることの困難さは莫大なものがあったことでしょう。

実際、日本ではイギリス製の毛織物はごくわずかな需要しかありません

でした。それはよろいや武器入れ箱の裏あてとして、馬の鞍下〔馬の鞍の下に敷く敷物〕として、そして時には大名の家臣の陣羽織に仕立てるために、武士の間に限定的な需要があった程度です。実際、最高の売上は1615年の大阪城の包囲戦のあいだに実現しました。日本についた最初のイギリス船上で日常的に用いられていた安価な陶器の壺が平戸で陶磁器の鑑定人のあいだで熱狂を呼び起こし、彼らがそのめずらしい形と見慣れないつやの見本品に多額のお金を払ったのを見て、ジョン・セーリスは大変興奮しました。その結果、次に到着した船はそのような安価な壺を2000個も持ってきましたが、もちろんそれに対する需要はありませんでした。

厳しい試練は次第にイギリス人たちに日本市場とそこでの商法についての洞察力をつけさせました。布に関する限り、日本人はくすんだ色、すなわち青、黄土、紫のくすんだ色を好み、緑やピンク、赤のような明るい色のものは売るのがむずかしいとすぐに気付きました。持ち込まれたインド製の布もまた日本人の好みの基準と年々変わるファッションによって売れ行きがちがいました。1614年に江戸で販売を始めるために派遣されたあるイギリス人商人は、「日本人の性格はもっとも珍奇な商品をもっとも高価なときに買うことである。……それで今彼らはあらゆる種類の新種の布、奇妙な絵柄と縞模様の布、いままで当地に招来されなかったような布を求めている」と書いています。しかし1年後には、需要のある唯一のインドの布は黒か緑の地の上に白い点のあるタイプのものでした。これは大変今日的な感じの響きがします。——すなわち変化するファッションが消費者の贅沢品の市場を支配し、そしてファッションを創り出そうとするよりファッションの後をのろのろ歩こうとすることは破産への道であったという点で。

イギリス人を日本市場とその銀貨に実質的に接触させてくれる唯一の商品は中国からの生糸でしたが、これは彼らにはまったく入手不可能でした。中国の港はマカオのポルトガル人以外の全てのヨーロッパ人に対して閉ざされていました。一組の問題の多い野蛮人に貿易を許した後、どうしてこ

れ以上他の者たちにわずらわせられねばならないのか、その理由を中国人は見出していませんでした。そして南洋と貿易するジャンク船によって東南アジアに運ばれた中国商品は通常先ずヨーロッパからの外来人でなく在地の支配者に売る決まりとなっていました。理論上、日本に根拠地を置く倭寇の16世紀中の凶暴な活動を理由として、中国政府は中国と日本の貿易を禁止し、そのためマカオのポルトガル人が生糸と銀の交換貿易の仲介者となり、その貿易が大長崎港の基礎を築き、またそれに付随してカトリックのキリスト教を日本にもたらしました。イギリス人がこの閉ざされた環の中に割って入ることはきわめて不可能であり、そしておそらく唯一驚くべきことは、彼らが自分たちの日本についての望みのない夢を放棄するまでに、10年間も留まったことでもあります。

イギリス人が去った後20年以内にポルトガル人とキリスト教の全ての外面上の存在の徴が一掃されました。徳川幕府は島原の乱の勃発によってひどく動揺し、オランダ人だけが日本に滞在することが許され、平戸から長崎湾の出島の狭い場所に移りました。私は時々思うことがあります。もしイギリス人もまた留まり、そしてもし日本がただ実用主義的で従順なオランダの代わりに、18世紀末までに世界的な勢力となったイギリスとの継続的な関係に巻き込まれていたとしたならば、その将来はどのように変わっていたであろうかと。

イギリス人は1673年に日本に戻ろうと試みました。つまり彼らの船リターン号が長崎の港に入ったときに。しかし彼らは貿易の許可を拒否され、実力行使をすとの脅しでもって退去させられました。それは一部にはオランダ人が長崎の当局者にイギリスの王〔チャールズ二世〕がポルトガルの王女〔ペドロ二世の姉妹のカタリナ〕を娶っていると伝えていたからでした。イギリス東インド会社はその精力に余るほどの対象を他の地に持っていました。すなわちインド、イラン、アラビア、タイ、インドネシア、ヴェトナム、台湾、そして中国自体などです。〔それで日本との貿易再開には執着しませんでした。〕リターン号の航海のわずか80年後にイギリス人は

中国における主要な外国人商人となっており、そして新しい驚くべき商品、すなわちお茶がヨーロッパ中の重要な消費製品となっていました。長い間かかりましたが、ついにアジア市場の教訓が学ばれ、新しい市場が創出されていました。

その間日本はいわゆる鎖国政策の下で閉鎖された国のままでした。しかしもちろん、日本は決して完全には閉鎖されていたのではなくて、むしろ幕府が望ましくないと考えた諸影響——その主なものは外の世界の知識がどんな形であれ広汎に広まることでしたが——に対して閉ざされていたのでした。支配階級は常に日本の外での出来事に対して気づいていました。長崎のオランダ人はアジアやヨーロッパなどどこかよそでの出来事について情報の報告をすることが求められていました。長崎にはまた毎年福建、広東からの中国人の商船が訪れ、それらの船はタイなど遠くの地方からの商品を運びましたが、それぞれの船の船主は自分が日本に来る前に寄港したアジアの諸港での出来事について報告することを求められました。オランダ語を読むことのできる世襲的な少数のエリートである長崎の通訳たちと学者たちによる西洋の科学と医学の研究は公的に認められ、統制されていました。そして幕府はヨーロッパの科学的な機器やその他の興味深いものをオランダから輸入するよう恒常的な命令を出していました。この間ずっと幕府がイギリスの重要性の増大に十分に気づいていたことと、そのような国と関係を持つことを好まなかったことはほとんど疑いありません。

イギリスが日本の「閉ざされた」市場に再びある程度の関心を持ち始めたのは18世紀の最後の10年間になってからでした。銀の夢はずっと昔に消えていましたが、日本はそれ以前の150年間銅の主要な世界的供給源であり、それはオランダ人によって運び出された主要な商品でした。1791年から1819年にかけての期間の多数の機会にイギリス船は貿易を求めて日本にやってきました。同じ頃、平戸商館の記録と1673年のリターン号の航海の記録がロンドンで印刷出版されました。同じ証拠からまったく異なった結論が引き出されました。すなわち東インド会社は日本市場は接近が困難で、

歴史はそれが利益のないものであることを示していると論じました。他方、アジアに新しい橋頭堡を探していた私的商人たちは、価値のある貿易が、その機会を捕らえるに十分なほど大胆で勇敢な人たちの到来を待ち望んでいると楽観的に考えていました。

これらの新しい接触の始まりは、その直前に樹立された北西カナダから中国の広東への太平洋を横断しての毛皮貿易から起こりました。船長ジェームズ・コルネットはアルゴノート号で毛皮——ラッコとビーヴァーの——の荷物を積んで、1791年の8月に九州の沿岸を航海し、日本の当局と接触を持とうとしました。しかし彼が陸地に接近するたびに日本の舟が出てきて、そして彼の中国人通訳は役立たずでしたが、彼はまもなく自分が決して日本の港に入ることを許されないだろうということを知りました。

1803年に英領インドから派遣された2隻の船が長崎から追い返されました。1808年にはイギリス海軍の船フェートン号が食糧と水を求めて長崎の港に入り、それらの供給を確保するために人質を取り、それから長崎の当局が攻撃する前に港を出帆しました。1819年にブラザー号の船長ピーター・ゴードンが貿易を求めて江戸湾に入りました。信じられないことに、ゴードンは日本の冬のきびしさから、銅と交換に毛織物を売ることができると確信しました。少なくとも彼の場合は平戸の教訓が心に留められていなかったように思われます。

その間にこれらの接触のうち最も重要なものが起こりました。1811年にイギリスはジャワ島をオランダから奪い、そしてイギリス東インド会社の職員であるトーマス・スタンフォード・ラッフルズが——彼はシンガポールの建設者として有名ですが——その島〔ジャワ島〕の副総督として任命されました。1813年と1814年にイギリス船がジャワから長崎に通常のオランダ船のふりをして派遣され、そして日本の通訳の黙認の下で貿易が出島で行われました。しかしその意図がイギリスの貿易をオランダの〔日本との〕結合関係に取って代えようということにあったことは決して公にされませんでした。しかしその計画には未来がありませんでした。というのは、

1815年までにヨーロッパにおけるナポレオンのフランスおよびその同盟国との長期間の戦争が終結し、ジャワをオランダに返還する準備がなされつつあったからです。1820年代にイギリスの捕鯨船が日本の海岸を訪問し始めました。恐ろしいほど荒っぽい漁師の間である捕鯨漁師たちはときどき孤立した日本の漁村を攻撃するという罪を犯し、他のときには日本の港に新鮮な水を求めて避難せざるを得ないときに、寄港を認められなかったり、警告なしに攻撃されたりしました。1837年にイギリス船モリソン号³が、カナダ沖で難破した3人の日本人水夫を返還したいということをも口実に江戸湾にはいりました。しかし日本の沿岸の砲台が砲撃を始めたので、モリソン号は追い返され、そののち鹿児島からも追い返されました。

したがって19世紀初めまでにイギリスは日本の端をかじりはじめ、幕府の驚きをつのらせておりました。鎖国令は修正され、一層厳格になりました。すなわち、海岸線に接近するすべての外国船を、備品や水や用件を言う機会を与えることなく、打ち払えという命令が出されました。しかし多くの日本人が外の世界が大変変化したので、日本はもはや外国船の扱いによって引き起こされるかもしれない重大な外国からの攻撃に抵抗する状態にないと理解していました。しかし真の驚きはイギリスが大中華帝国を破り、その諸港を西洋の貿易に対して開港させたというニュースから来ました。イギリスによる攻撃の可能性が日本にとって真の脅威だとみなされました。

実際には、日本に迫って開国させたのは1852-54年のペリー提督のものとアメリカ人でした。それに1854-55年のイギリスとの条約および1858年の重要なイギリスの外交使節団が続きました。日本はじょじょに近代世界に仲間入りしました。10年間の動乱の後、その動乱の間にイギリスの外交官たちは反徳川幕府の改革者たちの堅固な同盟者となりましたが、明治天皇の王政復古によって日本は協調と学習の政策に乗り出しました。日本は、

訳注3 モリソン号は通常広東のアメリカ貿易商社オリファント社所属のアメリカ船とされている。

中国の運命から教訓を引き出して、西洋の方法と知識とエキスパートを用いて、近代化と産業化に向けて出発しました。それは東洋における西洋のグローバリゼーションに向けての最初の重要な一歩でした。イギリスは当時世界的勢力としての絶頂期にあったので、日本の近代化において重要な役割を演じました。イギリスの商業会社は横浜、神戸、長崎に進出し、そこで彼らは唯一最大の商業的存在でありました。より重要なことには、明治政府はその近代化の努力の一環として多数のイギリス人科学者、技術者、財政家、法律家、海軍将校、そして特に教師を雇用し、そして英語は日本の学校や大学で教えられる主要外国語として採用されました。30年以内に日本は国際的威信と西欧諸勢力との対等性を実現し、その到達点が1902年の英日同盟となりました。

1945年以後の世界秩序の変化のために、アメリカを日本に対する主要な西側の影響であり、日本の国際的パートナーであると考えことはあまりにもたやすいことですが、しかしそれが比較的最近の進展であるということをおしはしたつもりであります。太平洋戦争は、日本に対して深い影響を与えたほかに、もちろんアジアにおける大英帝国を終わらせました。そしてそれに続いて世界中の脱植民地化が起きました。1960年代に日本の「経済的奇跡」が離陸した時に、イギリスの商業と産業は1613年から1623年までの間における平戸での最初の出会いを失敗に終わらせてしまった際の諸性格の一部を再び露呈してしまったということを私は認めます。イギリスの輸出業者は日本市場よりも、より母国に近い市場や利用しやすい市場を優先しました。市場リサーチはしばしば貧弱で、イギリスの輸出業者は日本とその文化を学ぶことをしないで、日本市場はいずれにしろとくに「むずかしい」という逃げ口上を述べました。

もっと最近では全てが変化しました。少なくとも、ある意味で明治時代とは逆に日本がイギリスに進出したことがその主な理由です。また電子情報革命が急速に金融市場を統合しつつあるということもあります。日本人のイギリスでの工業投資や財政投資はいまやわが国の経済の重要な部分を

占め、それに伴ってはるかに深い相互評価と相互理解をもたらしました。多くのイギリスの生産ラインが日本の労働慣行を採用し、時代遅れの重工業から解雇された多くのイギリス人労働者が、イギリス国内にあってヨーロッパ大陸部に輸出をしている日系会社に新しい雇用を見つけました。日本人の経営者は毎週末にイギリスの田舎でゴルフをする喜びを発見しました。ロンドンでの私の日常生活において、私は今典型的なイギリス人です。つまり私はホンダの自動車に乗り、ソニーのCDプレーヤーを聴き、三菱のテレビを見、しばしばやきそば屋で昼食を取り、あるいは出まへの寿司を取ります。そして私がロンドン市内の有名な観光地を通過するとき、小旗を持った女性に伴われた日本人観光客の長い行列を見ることはもはやありません。数年前にはそれを見るのが一般的でしたが、今ではその代わりに多くの個人の訪問者を見ます。実際これがグローバリゼーションです。そして願わくばそれが永続せんことを。

付記：この試訳は、本学学術研究会主催の「学術講演会」（1999年5月28日、本学図書情報センター多目的ホールにて）で行なわれた講演の原文に基づくものである。なお〔 〕内は原文の内容がわかりやすいよう訳者が付加したものである。